

金ロイオアン聖体礼儀（輔祭なし）

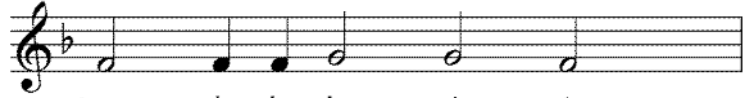
【 重聯禱 】

司祭) われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い
我等皆 靈 を全うして曰わん、我等の思を全うして曰わん、



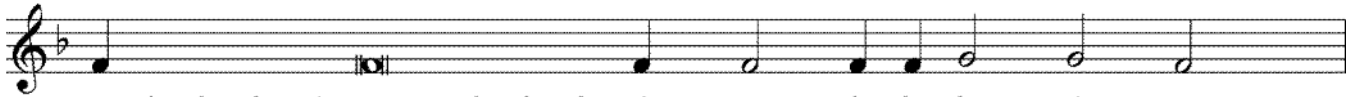
しゅあわれ めよ。
主 憐

司祭) しゅぜんのうしや わ れつそ かみ なんぢ いの き い あわれ
主全能者、吾が列祖の神よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、



しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ
神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわ く に てんのうおよ く に つかさど もの ため いの
又我が國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう およ
又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに

お ことごと われら けいてい ため いの
於ける悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわれら けいてい しよしさい しよしゅうどうしさい およ お われら しゅうけいてい
又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟

ため いの
の爲に禱る、

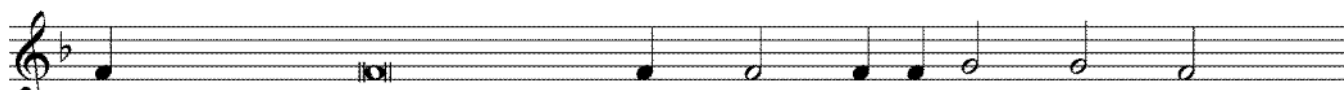


しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またつね きおく ふく しせい せいきょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしや およ
又恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正教の総主教、この聖堂の建立者、及

すで ねむ ことごと ふそけいてい こ ところ しよほう ほうむ せいきょう もの ため
び已に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲

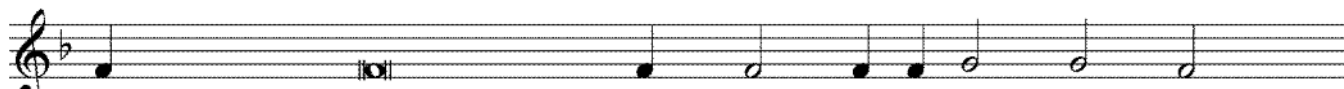
いの
に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またこの至尊なる聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び

ここに立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

(※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。)

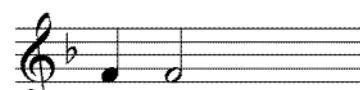
司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに

因りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ

爾の民に遣し給え、)

司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今

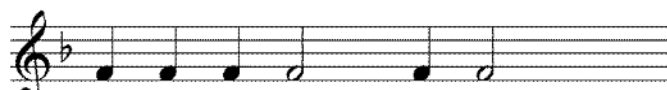
も何時も世に、



ア ミ ン。

【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、

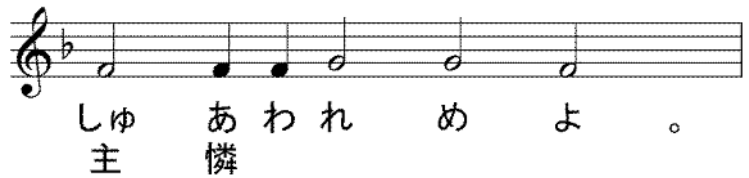


しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) ^{しんじつ ことば もつ かれら けいもう} 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、



司祭) ^{ぎ ふくいんけい かれら ひら} 義の福音經を彼等に啓かん、



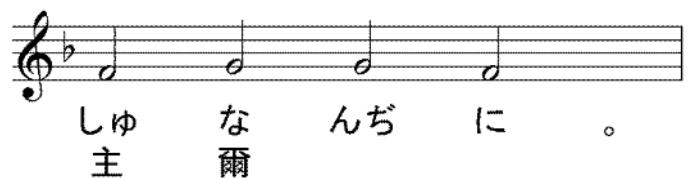
司祭) ^{かれら そのせい こう した きょうかい いつ} 彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも} 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、



司祭) ^{けいもうしゃ なんぢら こうべ しゆ かが} 啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、



司祭) (黙誦：主我が神、高きに居り卑きを臨み、爾の獨生子・神・我が主イイススハ

^{つかわ にんげん すくい もの なんぢ ぼく けいもうしゃ そのこうべ} リストスを遣して人間の救となしし者よ、爾の僕・啓蒙者・其首を

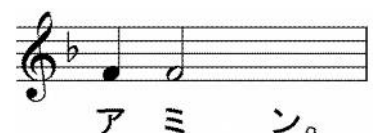
^{なんぢ かが もの かえり とき したが かれら ふくせい よくぼん しょざい ゆるし} 爾に屈めし者を顧み、時に随いて、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、

^{ふきゆう ころも たま かれら なんぢ せい こう した きょうかい いつ かれら なんぢ} 不朽の衣を賜い、彼等を爾が聖・公・使徒の教會に一にし、彼等を爾

^{えら むれ あわ たま} の選ばれたる群に合せ給え、)

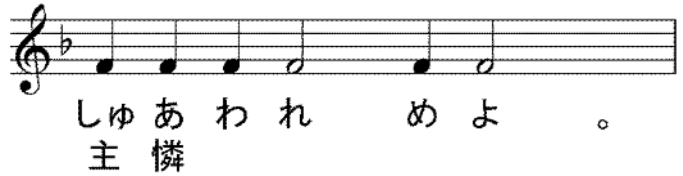
司祭) ^{ねがわ かれら われら とも なんぢちち こ せいしん しそんしえい な さんよう いま い} 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何

^{つ よよ} 時も世世に、

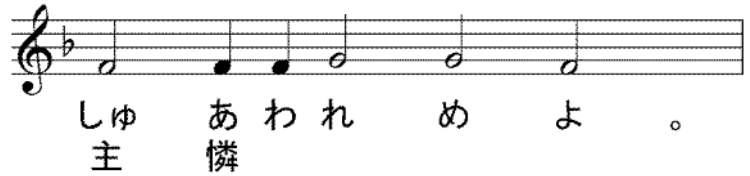


【 信者の聯禱 1 】

司祭) ^{しゅうけいもうしやい}衆 ^{けいもうしやい}啓蒙者出でよ、^{しゅうけいもうしやい}衆 ^{けいもうしやひとり}啓蒙者出でよ、^{ただしん}衆啓蒙者一人もなく、唯信
^{じゃまたまたあんわ}者復又安和にして^{しゅ いの}主に禱らん、



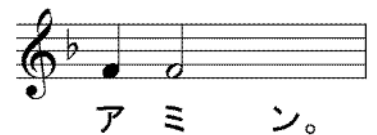
司祭) ^{かみ}神よ、^{なんぢ おんちよう}爾の恩寵を以て、^{もつ}我等を^{われら たす}助け救い^{すく}憐^{あわれ}み^{まも}護れよ、



司祭) ^{えいち}睿智、

司祭) (黙誦：^{しゅ ばんぐん かみ なんぢ}主、萬軍の神や、^{われら いま なんぢ}爾が我等に、^{せい}今も爾の^{さいだん まえ た なんぢ}聖なる祭壇の前に立ち、^{なんぢ}爾
^{じれん ふふく}の慈憐に俯伏し、^{われら つみ しゅうじん あやまち}我等の罪と衆人の過との爲に^{ため きとう}祈禱するを^{ゆる たま}赦し給いし
^{なんぢ かんしゃ かみ}を爾に感謝す、^{われら いのり い}神よ、我等の^{われら なんぢ}禱を納れ、我等を爾が衆人の爲に、^{なんぢ}爾
^{いのり ねがい むけつ まつり}に祈と願と無血の祭とを^{けん た}獻ずるに^{もの たま}勝うる者と^{われらなんぢ}なし給え、我等爾が^{せい}聖
^{しん ちから}神の力にて此の^{こ なんぢ}爾の^{ほうじ}奉事の爲に^{ため た}立てし者を、^{もの ていざい}定罪なく、^{つまづき}躓なく、^{そのりよう}其良
^{しん いさぎよ}心の潔き^{しょう}證を以て、^{もつ}何の時^{いづれ}何の^{ときいづれ}處にも^{ところ}爾を^{なんぢ}籲ぶに^よ適う者と^{かな}なし
^{なんぢわれら}て、^き爾我等に^{なんぢ}聴き、^{あいれん}爾が^{おお}哀憐の^よ多きに^{われら}依りて、^{ため}我等の爲に^{じんじ}仁慈の^{もの}者とな
^{いた}るを致せ、)

司祭) ^{けだしおよ}蓋凡そ^{こうえいそんきふくはい}光榮尊貴^{なんぢちち}伏拜は^こ爾父と^{せいしん}子と聖神に^き歸す、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世に、



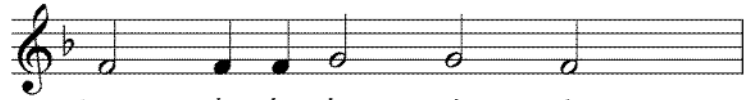
【 信者の聯禱 2 】

司祭) ^{われらまたまたあんわ}我等復又安和にして^{しゅ いの}主に禱らん、



しゅあわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

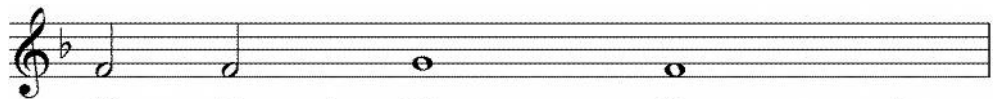


しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{えいち} 睿智、

司祭) (黙誦: ^{ぜん ひと あい しゅ われらまたかつしぼしぼなんぢ ふふく なんぢ いの われ} 善にして人を愛する主や、我等復且 数 爾に俯伏し、爾に禱る、我
^{ら いのり かえり われら たましい からだ およ にくたい れいしん けがれ} 等の禱を顧みて、我等の靈と體とを凡そ肉體と靈神との穢より
^{いさぎよ われら きず ていざい なんぢ せい さいだん まえ た たま} 潔くし、我等に、玷なく、定罪なく、爾の聖なる祭壇の前に立つを賜え、
^{かみ われら とも きとう もの いのち しん ぞくしん ちしき しんぽ あた} 神や、我等と偕に祈禱する者にも、生命と信と屬神の智識との進歩を與え
^{たま かれら つね おそれ あい もつ なんぢ つと きず ていざい なんぢ} 給え、彼等が常に畏と愛とを以て 爾に務めて、玷なく、定罪なく、爾
^{せいきみつ う なんぢ てんごく い た もの え たま} の聖機密を領け、爾の天國に入るに勝る者となるを得せしめ給え、)

司祭) ^{われらつね なんぢ けんべい もと まも こうえい なんぢちち こ せいしん けん ため} 我等常に 爾が權柄の下に護られて、光榮を 爾父と子と聖神に獻ずるが爲なり、
^{いま いつ よよ} 今も何時も世に、

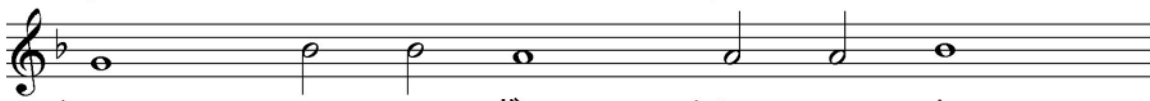


ア ミ ン。ア ミ ン。

【 ヘルヴィムの歌 】



われら っ っ し い
我 等 慎



んで ヘル ヴィ ムに の っ と
法



り 、 ヘル ヴィ ムに

の 法 お っと り、
 せ 聖 い さ んの う た あ
 を い の ち を ほ 生 命 施 ど
 こ す の せ 聖 い さ 三
 んしや に た て ま つ り
 者 獻 り て、
 この お よ の つ と め
 此 世 勤 め
 を し り ぞ く べ し、
 し り ぞ お く べ え し。

司祭) (黙誦：肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光榮の王に來り、或は
 ちか あるい ほうじ るた けだしなんぢ ほうじ てんぐん ため おおい
 近づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋爾に奉事するは、天軍の爲にも大
 にして畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本
 せい か うしな ひと われら ため アルヒエレイ またばんゆう しゅさい
 性を易えず失わずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主宰
 なるに縁りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋主我が神や、
 なんぢ ひとりてんち こと さいり なんぢ ほうぎ にな もの
 爾は獨天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィ

ムしゅの主、イズライリおうの王、獨ひとりせい 聖にして聖者せいしゃの中に息うちう者いこなり、故ゆえに我われ 爾なんぢ
ひとりぜん 獨 善にして善よく納いるる者ものに禱いのる、我われ 罪つみありて堪たえざる 爾なんぢ の僕ぼくを 顧かえり み、我が
たましい 靈 と心 とを 邪よこしま なる思慮しりよより 淨きよめ、我われ 神品しんぴんの恩おん 寵ちやうを 被こうむ れる者ものを、
爾なんぢ が聖神せいしんの 力ちからに 藉よりて、此この 爾なんぢ の聖せいなる 食案しょくあんの 前まえに 立たち、 爾なんぢ が至しじやう 淨
なる聖體せいたい至尊しそんなる 聖血せいけつの 機密きみつを 行おこな うに堪たうる者ものとなし 給たまえ、 蓋けだし 我われ 首こうべを
かが 爾なんぢ に就つき、 爾なんぢ に禱いのる、 爾なんぢ の 顔かんを 我われより 避さぐる勿なかれ、 我われを 爾なんぢ が僕
しゅう 衆 の中うちより 却しりぞ くる勿なかれ、 乃すなわち 我われ 罪つみありて 當あたらざる 爾なんぢ の僕ぼくに 此この 祭物さいもつを
獻ささぐるを 致いたさせ 給たまえ、 蓋けだし ハリストス 我われ が神かみよ、 爾なんぢ は 獻けんずる者ものと 獻けんぜらるる者もの、
受うくる者ものと 頒わかたるる者ものなり、 我われ等 光榮こうえいを 爾なんぢ と 爾なんぢ の 無原むげんの 父ちちと 至聖しせい 至善しぜんに
して 生命いのちを 施ほどこす 爾なんぢ の 神しんとに 獻けんず、 今いまも 何時いつも 世世よよに、)

司祭) (黙誦: 我等われら 奧密おうみつにして へルヴィムを 像かたどり、 聖三せいさんの 歌うたを 生命いのちを 施ほどこす 三者さんしゃに 歌うたい、)

今いま 此この 世よの 慮おもんばかり を 悉ことごとく 退しりぞく 可べし、 天使てんしの 軍ぐんの 見みえずして 荷にない 奉たてまつる 萬ばん
有ゆうの 王おうを 戴いた かんとするに 縁よる、 アリルイヤ、 アリルイヤ、 アリルイヤ。 我等われら 奧密おうみつ
にして へルヴィムを 像かたどり、 聖三せいさんの 歌うたを 生命いのちを 施ほどこす 三者さんしゃに 歌うたい、 今いま 此この 世よ
の 慮おもんばかり を 悉ことごとく 退しりぞく 可べし、 天使てんしの 軍ぐんの 見みえずして 荷にない 奉たてまつる 萬有ばんゆうの 王おうを
戴いた かんとするに 縁よる、 アリルイヤ、 アリルイヤ、 アリルイヤ。 我等われら 奧密おうみつにして へル
ヴィムを 像かたどり、 聖三せいさんの 歌うたを 生命いのちを 施ほどこす 三者さんしゃに 歌うたい、 今いま 此この 世よの 慮おもんばかり
を 悉ことごとく 退しりぞく 可べし、 天使てんしの 軍ぐんの 見みえずして 荷にない 奉たてまつる 萬有ばんゆうの 王おうを 戴いた かん
とするに 縁よる、 アリルイヤ、 アリルイヤ、 アリルイヤ。

神かみよ、 我われ 罪人ざいにんを 淨きよめ 給たまえ、 神かみよ、 我われ 罪人ざいにんを 淨きよめ 給たまえ、 神かみよ、 我われ 罪人ざいにんを
淨きよめ 給たまえ、)

【 大聖入 】

司祭) 願ねがくは 主しゅ・神かみは 其國そのくにに 於おいて、 我われが 國くにの 天 皇てんのう 及および 國くにを 司つかさどる 者ものを 恒つねに 記憶きおくせん、

今いまも 何時いつも 世世よよに、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい きょうかい つかさど そんな われら ぜんにつぼん ふしゅきょう
願くは主・神は其國に於て、教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教

つね きおく いま いつ よよ
セラフィムを恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい すで ねむ ふしゅきょう ふしゅきょう ふ
願くは主・神は其國に於て、已に寝りし府主教セルギイ、府主教イリネイ、府

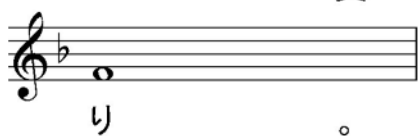
しゅきょう ふしゅきょう ふしゅきょう だいしゅきょう しゅ
主教ウラディミル、府主教フェオドシイ、府主教ダニイル、大主教ニコライ、主

きょう しゅきょう およ こと きおく われら すで ねむ かぞく
教ニコライ、主教ペトル、(及び殊に記憶せらるる某)我等の已に寝りし家族、

けいていしまい もろもろ えんしゃ ほうゆうら つね きおく いま いつ よよ
兄弟姉妹、諸の縁者、朋友等を恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい なんぢしゅうせいきょう ら およ こと き
願くは主・神は其國に於て、爾衆正教のハリストティアニン等(及び殊に記

おく
憶せらるる某)を恒に記憶せん、今も何時も世に、





司祭) (黙誦： 尊とうときイオシフは 爾なんぢの 潔いさぎよき身を木より下し、 淨きよき布ぬのに裹つつみ、 香こうりょう料りょうにて

おお 覆あらたい、 新はかなる墓おさに藏おさめり、

ハリストスよ、 爾なんぢは神かみなるにより、 體からだにて墓はかに在あり、 靈たましいにて地ち獄ごくに在あり、

うとう 右とう盜ともと偕てんどうに天あ堂ちちに在せいしんり、 父ともと聖ほうぎ神あと共に寶かぎり座ものに在いつり、 限なき者しとして一

さい 切みを満たまて給たまえり、

ハリストスよ、 我わが復ふくかつ活いづみの 泉なんぢたる 爾はかの墓いのちは、 生ほどこ命ものを施ちどうす者ちどう、 地ち堂どうより

うるわ 美ものしき者じつ、 実いかに如何おうなる王みやの宮かがやよりも耀ものける者あらわと顯あらわれたり、

とうと 尊なんぢきイオシフは 爾いさぎよの 潔みき身を木より下し、 淨きよき布ぬのに裹つつみ、 香こうりょう料りょうにて

おお 覆あらたい、 新はかなる墓おさに藏おさめり、

しゅ 主なんぢよ、 爾めぐみの 惠よに因おんりて恩たをシオンたに垂たれ、 イエルサリムじょうえんの 城た垣たを建たまて給

え、 其そのとき時に 爾なんぢ義ぎの 祭まつり、 獻ささげ物ものと燔やきまつり祭まつりを喜よろこび饗うげん、 其そのとき時に 人ひと人ひと 爾なんぢ

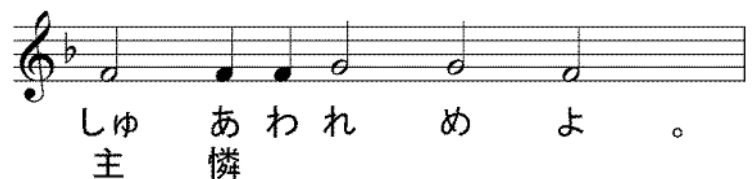
さいだん 祭さいだん壇こうしに 犢そなを奠そなえんとす、)

【 増聯禱 】

司祭) われらしゅ まえ わ いのり ま くわ 我等主の前に吾が禱を増し加えん、

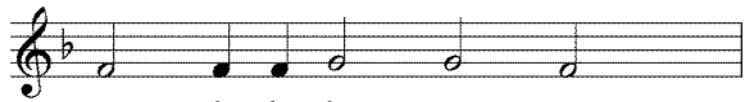


司祭) ささ 獻とうとげたる 尊さいひんき祭ため品の爲しゅに主いのに禱いのらん、



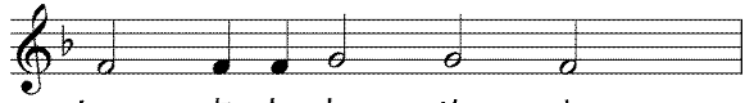
司祭) こ 此せいどうの 聖およ堂しん、 及つつしみび信かみと 慎おそと神おそを畏おそる心こころとを以もつて此こに來きたる者ものの爲ために主しゅに禱いのら

ん、



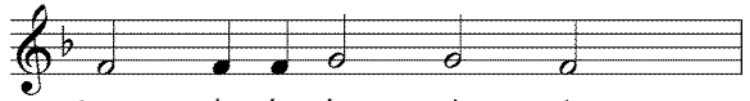
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの
我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



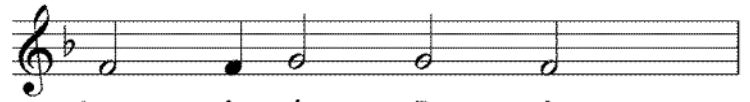
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



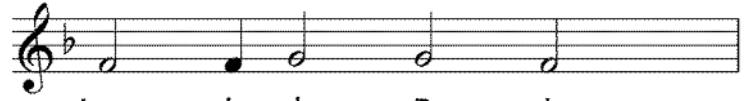
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと
此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



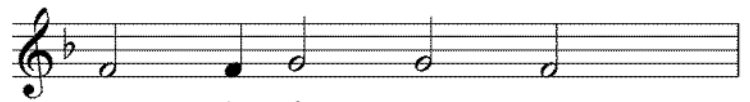
しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいいたい しゅごしゃ たま しゅ もと
平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



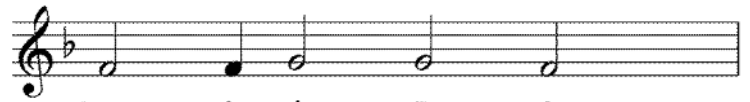
しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと
我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



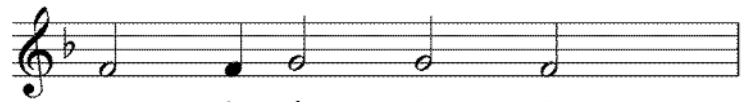
しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと
我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。
主 賜

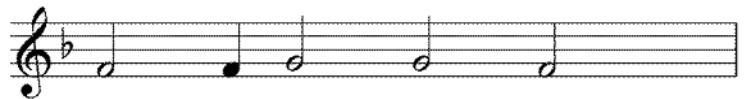
司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ
我等の生命の終がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び

ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、

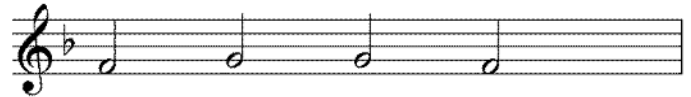


しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤ

と、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉く

の我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な ん ぢ に 。
主 爾

司祭) (黙誦：主・神・全能者、獨聖にして心を盡して爾を籲ぶ者より讚美の祭

を受くる者よ、我等罪人の禱をも受けて爾の聖なる祭壇に携え、我等を、

わが罪と衆人の過との爲に、爾に獻物と屬神の祭とを獻ずるに

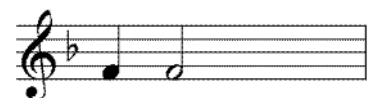
勝る者となし給え、我等に爾の前に恩寵を得せしめて、我等の祭は

爾に善く納れらる者となり、爾が恩寵の善神は臨みて、我等の中と此の

供えられたる祭品と爾の衆人と共に居るを致させ給え、)

司祭) 爾の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神

と偕に崇め讃めらる、今も何時も世々に、



ア ミ ン。

【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信經 】

司祭) 衆人に平安、



なんぢのしんにも 。
爾 神

司祭) 我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんが爲なり、

ち ち と こ と せ い し ん の 、 い っ た い に し
 父 子 聖 神 一 體

て わ か れ ざ る せ い さ ん し ゃ を 、
 分 聖 三 者

司祭) (黙誦: ^{しゅわれ ちから}主我の力よ、^{われなんぢ あい}我爾を愛せん、^{しゅ われ かため われ かくれが}主は我の防固、^{しゅわれ}我の避所なり、^{しゅわれ}主我の
^{ちから われなんぢ あい}力よ、^{しゅ われ かため われ かくれが}我爾を愛せん、^{しゅわれ ちから われ}主は我の防固、^{しゅわれ}我の避所なり、^{しゅわれ ちから われ}主我の力よ、^{われなんぢ あい}我
^{なんぢ あい}爾を愛せん、^{しゅ われ かため われ かくれが}主は我の防固、^{しゅわれ}我の避所なり、)

司祭) ^{もんもん}門、^{つつし}門、^き敬みて聽くべし、

わ れ し ん ず 、 ひ と つ の か み ち ち ぜ ん の う し ゃ 、 て ん
 我 信 一 神 父 全 能 者 天

と ち 、 み ゆ る と み え ざ る ば ん ぶ つ を つ く り し
 地 見 見 萬 物 造

しゅ を 、 ま た し ん ず 、 ひ と つ の しゅ い い す す は り す
 主 又 信 一 主

ト ス か み の ど く せ い の こ 子 、 よ ろ づ よ の さ き
 神 獨 生 子 萬 世 前

に ち ち よ り う ま れ 、 ひ か り よ り の ひ か り 、
 父 生 光 光

ま こ と の か み よ り の ま こ と の か み 、 う ま
 眞 神 眞 神 生

れ し も の に て つ く ら れ し に あ ら ず 、 ち ち
 者 造 非 父

と い っ た い に し て ば ん ぶ つ か れ に つ く ら れ 、
 一 體 萬 物 彼 造

われらひとびとのため、またわれらのすくい
我 等 人 人 の た 爲 、 ま た わ れ ら の す く い

のためにてんよりくだり、せいしんおよび
の た 爲 に て ん よ り く だ り 、 せ い し ん お よ び
天 降 聖 神 及

どうていぢよマリヤよりみをとりにひととな
童 貞 女 マ リ ヤ よ り み を と り ひ と と な
身 取 人

り、われらのためにポンティイピラトのときじゅう
我 等 の た 爲 に ポ ン テ ィ イ ピ ラ ト の と き じ ゅ う
時 十

じかにくぎうたれ、くるしみをうけほう
字 釘 う た れ 、 く る し み を う け ほ う
釘 苦 受 葬

むられ、だいさんじつにせいしよにかないて
第 三 日 聖 書 應

ふくかつし、てんのぼり、ちちのみぎに
復 活 天 升 父 右

ざし、こうえいをあらわしていけるもの
坐 し 、 こ う え い を あ ら わ し て い け る も の
坐 光 榮 顯 生 者

としせしものとしんぱんするためにまたきた
死 者 と し ン ぱ ん す る た め に ま た き た
審 判 爲 還 来

り、そのくにおわりなからんを、またしん
其 國 お 終 ら せ る べ し を 、 ま た し ん
信

ず、せいしんしゅいのちをほどこすものちちより
聖 神 主 生 の ち を ほ ど こ す も の ち ち よ り
父

いで、ちちおよびことともにおがまれほ
出 で 、 ち ち お よ び こ と と も に お が ま れ ほ
父 及 子 共 お 拜 が ま れ ほ 讚

められ、よげんしゃをもつてかつていいしを、
 預言者以嘗言

またしんず、ひとつのせいなるおおやけなるし使
 又信一聖公

とのきょうかいを、われみとむ、ひとつの
 徒教會我認一

せんれい、もつてつみのゆるしをうるを、
 洗禮以罪赦得

われのぞむししゃのふくかつ、ならびに
 我望死者復活並

らいせいのいのちを、アミン。
 來世生命

【 アナフォラ 】

司祭) ^{ただ た おそ た つつし あんわ せい ささげもの たてまつ} 正しく立ち、畏れて立ち、敬みて安和にして聖なる獻物を奉らん、

したしみのささげもの、ほめあげの
 親獻物讃揚

まつりを、
 祭

司祭) ^{ねがわ わ しゅ めぐみ かみちち いつくしみ せいしん したしみ なんぢしゅう} 願くは我が主イイススハリストスの恩、神父の慈、聖神の親は、爾衆

^{じん とも あ} 人と偕に在らんことを、

なんぢのしんとも、
 爾神

司祭) ^{こころうえ むか} 心上に向うべし、

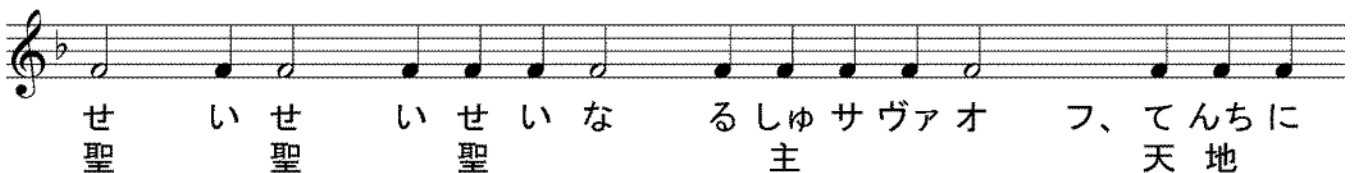


司祭) ^{しゅ かんしゃ} 主に感謝すべし、



司祭) (黙誦: ^{なんぢ かしょう なんぢ さんよう なんぢ さんび なんぢ かんしゃ なんぢ いつさい} 爾を歌頌し、爾を讃揚し、爾を讚美し、爾に感謝し、爾が一切
^{おさ ところ おい なんぢ ふ おが とうぜん ぎ けだしなんぢ なんぢ ぞく} 治むる處に於て爾に伏し拜むは當然にして義なり、蓋爾と爾の獨
^{せいし なんぢ せいしん い がた し がた み べ はか べ なが} 生子と爾の聖神は、言い難く、知り難く、見る可からず、測る可からず、永
^{あ つね かわ かみ なんぢ われら む ゆう おちい もの また} く在り、恒に變らざる神なり、爾は我等を無より有となし、陥りし者を復
^{おこ およ われら てん のぼ なんぢ らいせい くに たま いた ぼんじ} 起し、及び我等を天に升らしめて、爾が來世の國を賜うに至るまで萬事
^{おこな や これら ため およ われら し ところ し ところ あらわ ところ} 行いて止めず、此等の爲に、凡そ我等が知る所、知らざる所、顯れし所、
^{あらわ ところ われら たま しょおん ため われらなんぢ なんぢ ぞくせいし} 顯れざりし所の我等に賜わりし諸恩の爲に、我等爾と爾の獨生子と
^{なんぢ せいしん かんしゃ またこ ほうじ ため なんぢ かんしゃ なんぢこれ われら} 爾の聖神とに感謝す、又此の奉事の爲に爾に感謝す、爾之を我等の
^{て う あまん たま しか せんせん てんししゅおよ まんまん てんし} 手より領くるを甘じ給えり、然れども千千の天使首及び萬萬の天使、ヘル
^{およ りくよく もの たもく もの たか かけ もの つばさ そな もの} ヴィム及びセラフィム、六翼の者、多目の者、高く翔る者、翼を具うる者
^{なんぢ まえ た} は爾の前に立ちて、)

司祭) ^{かちうた うた よ さけ い} 凱歌を歌い、籲び、叫びて曰う、



なんぢのこおえ いはあまねし、いとたか
爾 光 榮 普 至 高

きにオサ ンナ、しゅのなにてきたるものは
主 名 來 者

あがめほめらる、いとたかきに
崇 讚 至 高

オサ ンナ。

司祭) (黙誦：人^{ひと}を愛^{あい}する主^{しゅ}宰^{さい}よ、我等^{われら}も此^この福^{ふく}たる軍^{ぐん}と偕^{とも}に顛^よびて曰^いう、聖^{せい}なる哉^{かな}、至^し聖^{せい}なる哉^{かな}、爾^{なんぢ}と爾^{なんぢ}の獨^{どく}生子^{せいし}と爾^{なんぢ}の聖^{せい}神^{しん}、聖^{せい}なる哉^{かな}、至^し聖^{せい}なる哉^{かな}、爾^{なんぢ}の光^{こう}榮^{えい}は威^い嚴^{げん}なり、爾^{なんぢ}は爾^{なんぢ}の世^せ界^{かい}を愛^{あい}して、爾^{なんぢ}の獨^{どく}生子^{せいし}を賜^{たま}うに至^{いた}り、凡^{およ}そ之^{これ}を信^{しん}ずる者^{もの}に沈^{ちん}淪^{りん}を免^{まぬ}かえて永^{えい}生^{せい}を得^えせしむ、彼^{かれ}來^{きた}りて、凡^{およ}そ我^{われ}等^らに於^おける定^{てい}制^{せい}を成^{せい}全^{ぜん}し、付^{わた}されし夜^よ、正^{ただ}しく言^いえば親^{みづか}ら己^{おのれ}を世^せ界^{かい}の生^い命^ちの爲^{ため}に付^{わた}しし夜^よ、其^{その}聖^{せい}にして至^し淨^{じょう}無^む玷^{てん}なる手^てに餅^{へい}を取^とり、感^{かん}謝^{しゃ}し、祝^{しゅ}讚^くし、成^{せい}聖^{せい}し、撃^ききて其^{その}聖^{せい}なる門^{もん}徒^と及^{およ}び使^し徒^たに予^{あた}えて曰^いえり、)

司祭) 取^とりて食^{くら}え、是^{これ}我^わが體^{たい}、爾^{なんぢ}等^らの爲^{ため}に擘^さかるる者^{もの}、罪^{つみ}の赦^{ゆるし}を得^えるを致^{いた}す、

ア ミ ン。

司祭) (黙誦：同^{おなじ}く晚^{ばん}餐^{さん}の後^{のち}に爵^{しゃく}を執^とりて曰^{いわ}く、)

司祭) 皆^{みな}之^{これ}を飲^のめ、是^{これ}我^わの新^{しん}約^{やく}の血^ち、爾^{なんぢ}等^ら及^{およ}び衆^{おほ}くの人^{ひと}の爲^{ため}に流^{なが}さるる者^{もの}、罪^{つみ}の赦^{ゆるし}を得^えるを致^{いた}す、

ア ミ ン。

司祭) (黙誦: ^{ゆえ われらこ すくい ほどこ いましめ およ およ われら ため あ こと すなわちじゅう} 故に我等此の救を施す誠、及び凡そ我等の爲に有りし事、即十
^{じか はか だいさんじつ ふくかつ てん のぼ こと みぎ ぎ こと こうえい さいど} 字架、墓、第三日の復活、天に升る事、右に坐する事、光榮なる再度の
^{こうりん きおく} 降臨を記憶して、)

司祭) ^{なんぢ たまもの なんぢ しょぼく しゅう ためいつさい ため なんぢ たてまつ} 爾の賜を、爾の諸僕より、衆の爲一切の爲に爾に獻りて、

しゅ う や あ、なんぢ
主 爾
を あ が め う た い、
崇 歌
な んぢ あ んぢ を ほ め あ
爾 讚
げ、なんぢ に か んしゃ
感謝
し、わ が か み や
神 我
な んぢ に い の る、
爾 祈
な んぢ に い い の
爾 祈
る。

司祭) (黙誦: ^{われらまたなんぢ これいち むけつ ほうじ けん ねが いの せつ もと なんぢ} 我等復爾に此の靈智なる無血の奉事を獻じて、願ひ祈り切に求む、爾
^{せいしん われらおよ こ そな さいひん つかわ たま} の聖神を我等及び此の奠えたる祭品に遣し給え、)

司祭) (黙誦: ^{だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と} 第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取
^{あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた かみ いさぎよ} り上ぐる事勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、潔



さ い わ い な り と と の う る は ま こ と に あ た
福 称 眞 當
れ り 。
へ ル ヴ ィ ム よ り と う と く セ ラ フ ィ ム に な ら び な く
尊 並
さ か え 、 み さ お を や ぶ ら ず し て か み こ と
榮 貞 操 壊 神 言
ば を う み し 、 じ つ の し ょ う し ん ぢ よ た る な ん ぢ
生 實 生 神 女 爾
を あ が め ほ む 。
崇 讚

司祭) (黙誦: ^{せいよげんしゃ} 聖預言者・^{ぜんく} 前駆・^{じゅせん} 授洗イオアン、^{こうえい} 光榮にして^{さんび} 讚美たる^{せいしと} 聖使徒、及び^{およ} 爾が

^{しよせいじん} 諸聖人の爲に^{ため} 獻ず、^{かみ} 神よ、^{かれら} 彼等の^{きとう} 祈禱に^よ 因りて我等を^{われら} 顧み、^{かえり} 並に^{ならび} 凡そ

^{えいせい} 永生の^{ふくかつ} 復活の^{のぞみ} 望を^{いだ} 懐きて^{ねむ} 寝りし者を^{もの} 記憶して、^{きおく} 彼等を^{かれら} 爾が^{なんぢ} 顔の^{かんばせ} 光

^{てら} の照す^{ところ} 所に^{あんそく} 安息せしめ^{たま} 給え、

又^{また} 爾に^{なんぢ} 禱る、^{いの} 主よ、^{しゅ} 爾が^{なんぢ} 眞實の^{しんじつ} 言を^{ことば} 正しく^{ただ} 傳うる^{つた} 正教者の^{せいきょうしゃ} 凡の^{およそ}

^{しゅきょうひん} 主教品、^{およそ} 凡の^{しさいひん} 司祭品、^よ ハリストスに^{ほさいひん} 因る^{およ} 輔祭品、^{ことごと} 及び^{しんぴん} 悉くの^{しんぴん} 神品を

^{きおく} 記憶せよ、

又^{また} 此の^{れいち} 靈智なる^{ほうじ} 奉事を、^{ぜんせかい} 全世界の爲、^{せい} 聖・^{こう} 公・^{しと} 使徒の^{きょうかい} 教會の爲、^{ため} 潔淨

にして^{とうと} 尊く^{いのち} 生を^{わた} 度る者の爲、^{もの} 我が^{ため} 國の^わ 天皇及び^{くに} 國を^{てんのうおよ} 司る者の爲に

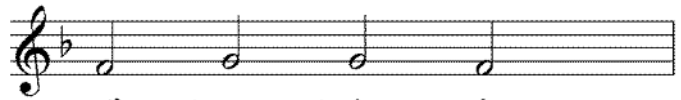
^{なんぢ} 爾に^{けん} 獻ず、^{しゅ} 主よ、^{かれら} 彼等に^{たいへい} 泰平の^{こくせい} 國政を^{たま} 賜え、^{われら} 我等も^{かれら} 彼等の^{へいわ} 平和により、

^{およそ} 凡の^{けいけん} 敬虔と^{けつじょう} 潔淨とを^{もつ} 以て、^{てんせいあんぜん} 恬静安然にして^{いのち} 生を^{わた} 度らんが爲なり、)

司祭) 主よ、殊に^{しゅ} 教會を^{こと} 司る^{きょうかい} 尊貴なる^{つかさど} 我等の^{そんき} 全日本の^{われら} 府主^{ぜんにつぼん} 教^{ふしゅきょう} セラフィムを^{きおく} 記憶し、

かれら へいあん ぶなん そんなき そうけん ちょうじゅ もの およ なんぢ しんじつ ことば ただ つた
彼等を平安・無難・尊貴・壮健・長壽なる者、及び爾が眞實の言を正しく傳

もの なんぢ せい きょうかい あた たま
うる者として、爾の聖なる教會に與え給え、



ば んみ んを も 。
萬 民

司祭) (黙誦：主よ、我等が居る所しゅ われら おと ところの此の都邑こ まちと凡の都邑およそ まちと地方ちほう、及び信を以て此の中

に居る者を記憶せよ、主よ、航海する者お もの きおく しゅ こうかい、旅行する者もの りょこう、病を患うる者もの やまい うれ、艱

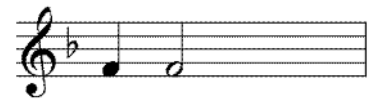
難に遭う者なん あ もの とりこ、擲となりし者もの およ かれら、及び彼等の救を記憶せよ、主よ、爾の諸聖

堂に物を獻りどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな、善業を行う者もの およ ひんしゃ きねん、及び貧者を記念する者を記憶し、及

び我等衆人に爾の隣を垂れ給え、)

司祭) 並に我等に、口を一にし心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至嚴の名を讃

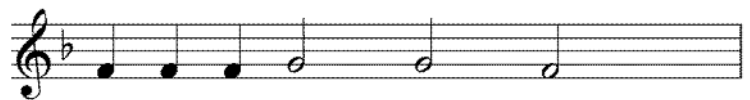
えいさんしょう するを賜え、今も何時も世に、



ア ミ ン。

司祭) 願くは大なる神ねがわ おおい かみ わ きゆうしゅ、我が救主あわれみ なんぢしゅうじんイイススハリストスの隣とも あは、爾衆人と偕に在ら

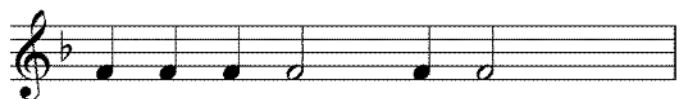
んことを、



なんぢの し んと も 、
爾 神

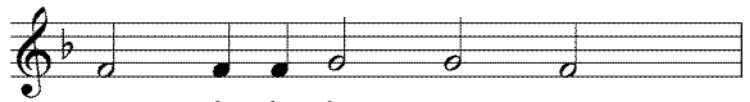
【 増聯禱 】

司祭) 我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、



しゅあわれ めよ 。
主 隣

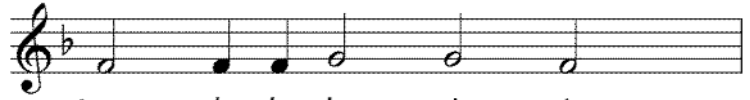
司祭) 已に獻ぜられ及び聖にせられし尊すで けん およ せいき祭品の爲とうと さいひん ために主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

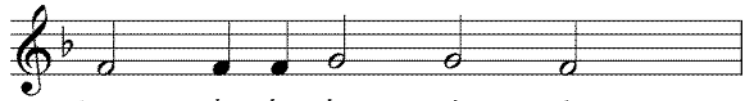
司祭) ^{ひと あい わ かみ これ そのせい てんじょう むけい さいだん お ぞくしん けいこう} 人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香と

^{う われら むく しんみょう おんちよう せいしん たまもの くだ ため いの}して享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、



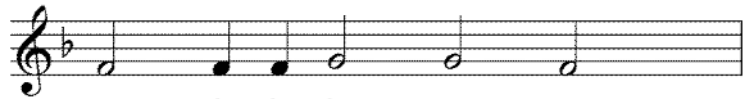
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの}我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



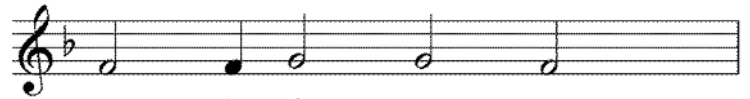
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



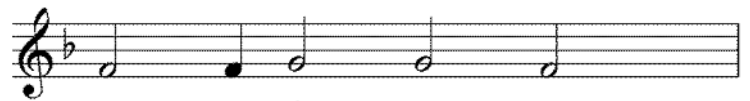
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと}此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、



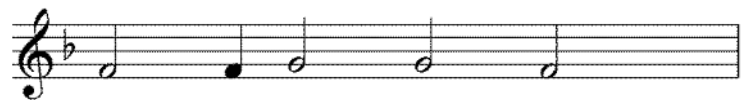
しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと}平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む



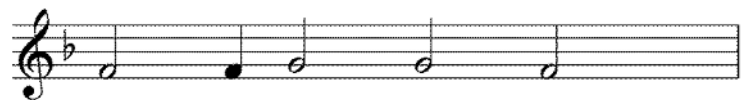
しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと}我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



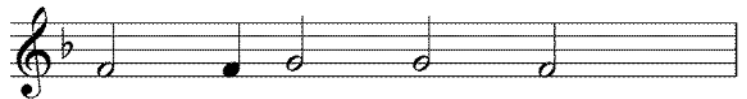
しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと}我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。
主 賜

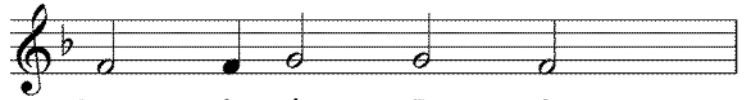
司祭) ^{われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと} 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ} 我等の生命の終がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び

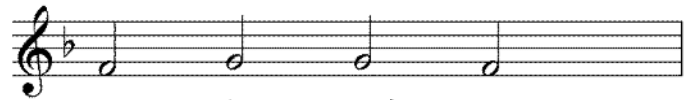
^{おそ しんばん おい よろ こたえ たま もと} ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{しん どういつ せいしん たいごう もと われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび} 信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并

^{ことごと われら いのち もつ かみ いたく} に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な んぢ に 。
主 爾

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい われら わ ことごと いのち のぞみ なんぢ ゆだ ねが} 人を愛する主宰よ、我等は我が悉くの生命と望とを爾に委ねて、願

^{いの せつ もと われら きよ りょうしん もつ なんぢ てんじょう おそ きみつ} い祈り切に求む、我等に、淨き良心を以て、爾が天上の畏るべき機密、

^{こ せい ぞくしん えん あづか たま こ つみ ゆるし あやまち надめ} 此の聖せられたる屬神の筵に與るを賜いて、此れが罪の赦、過の宥、

^{せいしん たいごう てんごく しぎょう なんぢ お ゆうかん しんあんあるい ていざい} 聖神の體合、天國の嗣業、爾に於ける勇敢となりて、審案或は定罪

^{いた たま} とならざるを致させ給え、)

【 天主經 】

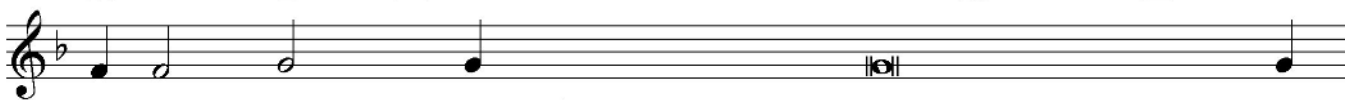
司祭) ^{しゅさい われら いさみ もつ つみ え あえ なんぢてん かみちち よ い たま} 主宰よ、我等に勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾天の神父を籲びて言うを賜え、



てんにいますわれらのちちよ、ねがわくは
天 在 我 等 父 願



なんぢのなはせいとせられ、なんぢのくには
爾 名 聖 爾 國



きたり、なんぢのむねはてんにおこなわるる
來 爾 旨 天 行

が ごとく ちにも おこなわれん。わが にち よう
 如 地 行 我 日 用
 の か て を こんにち われらに あた え た ま え 。
 糧 今日 我 等 與 給
 われらに おいめ ある もの を われら ゆる すが ご
 我 等 債 者 我 等 免 如
 と く 、 われら の おいめ を ゆる した ま
 我 等 債 免 給
 え 。 われら を いざ ない に みち び か ず 、
 我 等 誘 導
 な お われら を きょう あく より す く いた ま
 猶 我 等 凶 惡 救 給
 え 。

司祭) ^{けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こせいしん き いま いつ よよ} 蓋 國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

ア ミ ン。

司祭) ^{しゅうじん へいあん} 衆人に平安、

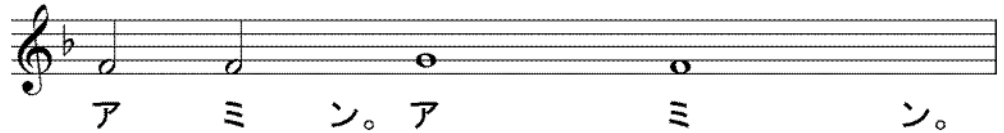
なんぢの し んにも 。
爾 神

司祭) ^{なんぢら こうべ しゅ かが} 爾等の首を主に屈めよ、

しゅ な んぢ に 。
主 爾

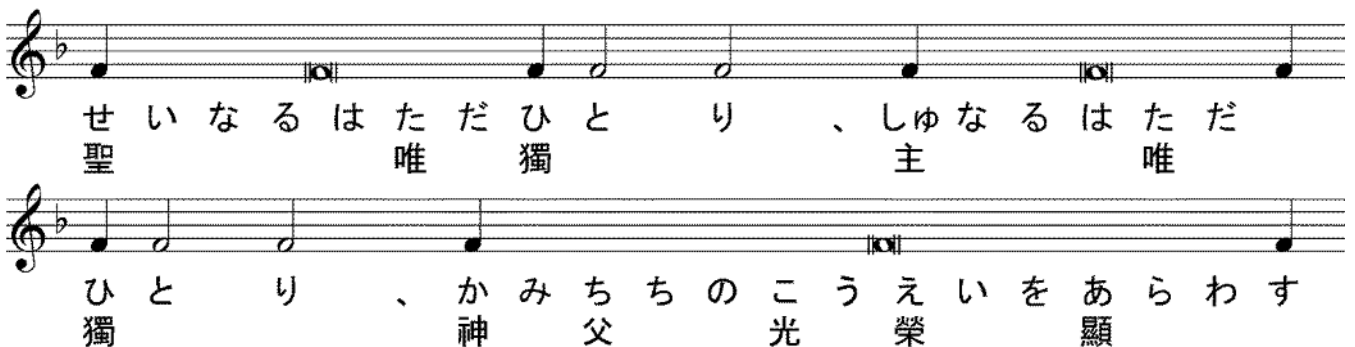
司祭) (黙誦: ^み見る可^べからざる王、^{おう}其^{その}量^はり難^かき能^が力^たを以て萬有を畫定し、^{その}其慈憐の多^{おお}
^{もつ}きを以て萬物^{ばんぶつ}を無^むより有^{ゆう}となしし主よ、^{しゅ}我等^{われら}爾^{なんぢ}に感謝^{かんしゃ}す、^{しゅ}主宰^{しゅさい}よ、^{なんぢ}爾
^{みつ}親^{かな}ら爾^{なんぢ}に首^{こう}を屈^かめし者^{ものが}を天^{てん}より顧^{かえり}み給^{たま}え、^け蓋^だ血^け肉^だに屈^かめしに非^{あら}ず、
^す乃^{すな}爾^{なんぢ}畏^{おそ}るべき神^{かみ}に屈^かめり、^ゆ故^ゆに主^か宰^がよ、^{しゅ}爾^{なんぢ}は此^{ここ}に奠^そえたる者^{もの}を、^{われ}我
^ら等^{しゅ}衆^う人^{じん}の善^{ぜん}の爲^{ため}に、^{かく}各^{かく}人^{じん}の必要^{ひつ}に應^{よう}じて等^{ひと}く頒^{わか}ち、^{こう}航^{こう}海^{かい}する者^{もの}と偕^{とも}
^に航^{こう}海^{かい}し、^り旅^り行^{こう}する者^{もの}と偕^{とも}に旅^り行^{こう}し、^れ靈^れ體^{たい}の醫^い師^しとして、^や病^{まい}を患^{うれ}うる者^{もの}
^いを醫^いし給^{たま}え、)

司祭) ^{なん}爾^ぢが獨^{どく}生子^{せい}の恩^{おん}寵^{ちやう}と慈^じ憐^{れん}と仁^{じん}愛^{あい}とに因^よりてなり、^{なん}爾^ぢは彼^{かれ}と至^し聖^{せい}至^し善^{ぜん}にして生命^{いのち}
^ほを施^{どこ}す爾^{なん}の神^{しん}と偕^{とも}に讚^{さん}揚^{やう}せらる、^{いま}今^{いつ}も何^よ時^よも世^よ世^よに



司祭) (黙誦: ^{しゅ}主^{われ}イ^かス^みス^{なん}ハ^{せい}リス^すト^{まい}ス^{なん}我^{なん}等^ぢの神^{くに}よ、^{こう}爾^{えい}の聖^{ほう}なる住^ほ所^うと^ほ爾^うが國^{くに}の光^{こう}榮^{えい}の寶^{ほう}
^ぎ座^ざより眷^かみ給^ええ、^う上^えには父^{ちち}と偕^{とも}に坐^ぎし、^こ此^こには見^みえずして我^{われ}等^{とも}と偕^おに居^{もの}る者^{もの}よ、
^{きた}來^{われ}りて我^{せい}等^{なん}を聖^{けん}にし、^て爾^もの權^{なん}能^ぢの手^{しじょう}を以^{たい}て、^し爾^しが至^し淨^{そん}の體^ちと至^ち尊^{そん}の血^ちと
^{われ}を我^さ等^づに授^{また}け、^{われ}又^も我^も等^つを以^{しゅ}て衆^う人^{じん}に授^さけ給^{たま}え、
^か神^{われ}よ我^き罪^{われ}人^あを淨^ためて、^か我^{われ}を憐^あみ給^{たま}え、^か神^{われ}よ我^き罪^{われ}人^あを淨^ためて、^{われ}我^あを憐^あ
^{たま}み給^かえ、^か神^{われ}よ我^き罪^{われ}人^あを淨^ためて、^{われ}我^あを憐^あみ給^{たま}え、)

司祭) ^つ謹^つみて聽^きくべし、^{せい}聖^{もの}なる物^{せい}は聖^{ひと}なる人^{ひと}に、





司祭) (黙誦：神の ^{かみ こひつじ き わか} 羔 は剖かれ分たる、彼は剖かれて ^{かれ き ぶんり} 分離せず、恒に食われて ^{つね くら} 永く ^{なが つ} 盡き
ず、^{すなわちう} 乃 領くる ^{もの せい} 者を聖にす、)

※^{レーゲント}信徒領聖まで、聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。

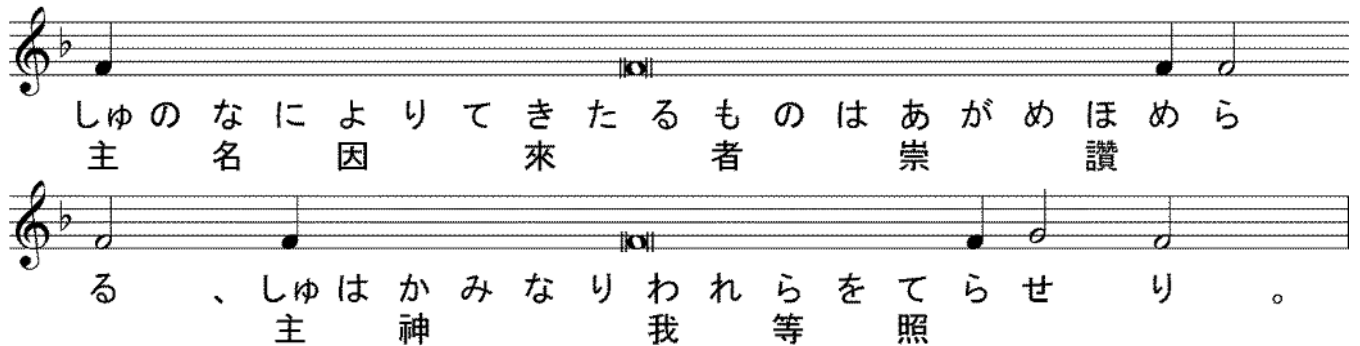
(奉事規程が指定しているのは『主日領聖詞』、すなわち第148聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に2節以下をアンティフォン形式で歌う、若しくは誦經する。本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。日本正教会では通年「大パスハ領聖詞」を歌うことが多い。日本正教会では神品領聖時に『主日領聖詞』に代えて、早課イルモス(其の週の調、又は生神女のカタワシヤ等)、スティヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。)

【 (大パスハ) 領聖詞 】



【 信徒領聖 】

司祭) ^{かみ おそ} 神を畏る ^{こころ しん} 心と信とを ^{もつ ちか} 以て ^{きた} 近づき來れ、



全員) ^{しゅ われしん} 主よ我信じ、^{か う みと} 且つ承け認めて、^{なんぢ じつ} 爾を ^{せいかつ かみ こ} 實にハリストス生活の神の子、^{ざいにん すく} 罪人を救うが
^{ため よ} 爲に ^{きた} 世に來りし ^{もの} 者となす、^{しゅうざいにん} 衆罪人の中 ^{うちわれだいち} 我第一 ^{またしん} なり、又 ^こ 信ず、^{すなわちなんぢ} 此れは ^し 乃爾 ^{じゆう} が至
^{じゆう} 淨の體、^{たい} 此れは ^こ 乃爾 ^{しそん} が至尊の血なりと、^{ゆえ なんぢ} 故に爾に ^{いの} 祈る、^{われ あわれ} 我を憐み、^わ 我が ^{じゆう} 自由

じゆう ことば おこない し し おか しょがい ゆる たま ならび
 と自由ならずして、言と行にて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給え、並
 われ ていざい なんぢ しじょう きみつ う つみ ゆるし えいせい え いた
 に我に定罪なく、爾が至浄なる機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るを致させ
 たま
 給え、アミン。

かみ こ いまわれ なんぢ きみつ えん あづか もの い たま けだしわれなんぢ あだ き
 神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機
 みつ つ なんぢ ごと せつぷん な すなわちうとう ごと なんぢ う
 密を告げざらん、また爾にイウダの如き接吻を爲さざらん、乃右盜の如く爾を承
 みと い しゅ なんぢ くに おい われ きおく しゅ いの なんぢ せい きみつ
 け認めて曰う、主よ、爾の國に於て我を記憶せよと、主よ、祈る爾の聖なる機密を
 う
 領くるは、我が爲に審案或は定罪とならず、すなわち靈體の醫とならんことを、

【 (大パスハ) 領聖詞 】

※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。

ハリストスのせいたいをうけ、ふしのいづみ
 聖體領 不死泉
 をのめよ。

司祭) (黙誦：ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス・獨罪なき者を拜むべし、ハ
 われらなんぢ じゅうじか おが なんぢ せい ふくかつ うた ほ なんぢ
 リストスよ、我等爾の十字架を拜み、爾の聖なる復活を歌い讃む、爾
 われら かみ なんぢ ほかた かみ し ただなんぢ な と な しんじゃ
 は我等の神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱う、信者よ、
 みなきた せい ふくかつ おが じゅうじか よろこび ぜんせかい
 皆來りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、十字架にて喜は全世界に
 のぞ われらつね しゅ ほ あ そのふくかつ あが うた しゅ じゅうじか
 臨めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架
 くぎ しの し もつ し ほろぼ
 に釘うたるるを忍びて、死を以て死を亡ししによる、
 あらた ひか ひか しゅ こうえいなんぢ かがや
 新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮爾に輝けばなり、シオン
 いまいわ たのし なんぢ いさぎよ しょうしんぢよ なんぢ う しゅ ふくかつ
 よ、今祝いて樂めよ、爾も潔き生神女よ、爾が生みし主の復活を
 よろこ たま
 歡び給え、
 ああおおい しせい ああちえ かみ ことば ちから なんぢ
 嗚呼大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、爾

くに く らい ひ おい われら なおしたし なんぢ う たま
が國の暮れざる日に於て、我等に猶親く爾を領けさせ給え

しゅ なんぢ しそん ち もつ なんぢ しよせいじん きとう よ ここ きおく
主よ、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せら

もの しよざい あら たま
れし者の諸罪を滌い給え、

ひと あい しゅさい わ たましい おんしゅ われら こ ひ おい なんぢ てん
人を愛する主宰、我が靈の恩主よ、我等に、此の日に於ても、爾が天

じょう ふし きみつ う たま なんぢ かんしゃ われら みち なお われら
上の不死の機密を領けさせ給いしを爾に感謝す、我等の途を直くし、我等

しゅうじん なんぢ おそ おそ けんご われら いのち まも われら あゆみ かつ
衆人を爾を畏るるの畏れに堅固にし、我等の生命を護り、我等の歩を固

たま こうえい しょうしんぢょ えいていどうぢょ およ なんぢ しよせいじん いのり
め給え、光榮なる生神女・永貞童女マリヤ及び爾が諸聖人の祈と

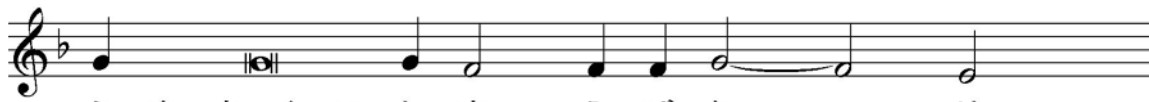
ねがい よ
願とに因りてなり、)

※ 全員が元の位置に戻って歌う準備ができてから「アリルイヤ」を歌う。

Musical notation for the hymn 'Ari-ru-ya'. It consists of three staves of music in a single system. The first staff contains the notes for 'ア', 'リ', 'ル', and 'イヤ', with a comma and 'ア' following. The second staff contains 'リ', 'ル', 'イヤ', a comma, 'ア', 'リ', 'ル', and 'イ'. The third staff contains 'ヤ' and a period. The notes are written on a treble clef staff with a key signature of one flat (B-flat).

司祭) かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ
神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ、

Musical notation for the priest's prayer. It consists of three staves of music in a single system. The first staff contains the notes for 'われら', 'す', 'で', 'に', 'ま', 'こと', 'の', 'ひ', 'か', 'り', 'を', 'み', 'てん', 'の'. The second staff contains 'せい', 'しん', 'を', 'う', 'け', 'た', 'だ', 'し', 'き', 'しん', 'を', 'え', 'て'. The third staff contains 'わ', 'か', 'れ', 'ざ', 'る', 'せい', 'さん', 'しゃ', 'を', 'お', 'が', 'む', 'か', 'れ', 'われ'. The notes are written on a treble clef staff with a key signature of one flat (B-flat).



ら を す く い た ま え ば な り 。
 等 救 給

司祭) (黙誦: 神よ、願^{かみ}くは^{ねがわ}爾^{なんぢ}は^{しよてん}諸^{うえ}天^あの上^{なんぢ}に^{こうえい}舉^{ぜんち}げられ、爾^{おお}の^{われ}光^ら榮^{かみ}は^{つね}全^{あが}地^ほを^ほ蔽^めわん、我^ら等^らの^ら神^らは^ら恒^らに^ら崇^らめ^ら讃^らめ^ららる、)

司祭) ^{いま}今^{いつ}も^{よよ}何^{よよ}時^{よよ}も^{よよ}世^{よよ}に、



ア ミ ン。



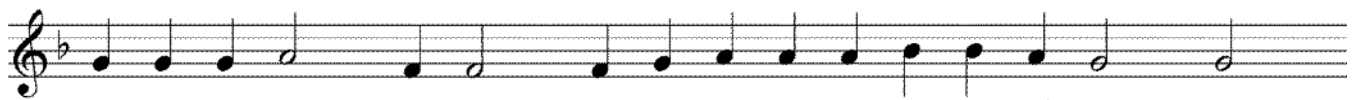
しゅよ、なんぢのこうえいをうたわあんに
 主 爾 光 榮 歌



ほめうたをもつてわがくちにみたま
 讚 歌 以 我 口 満 給



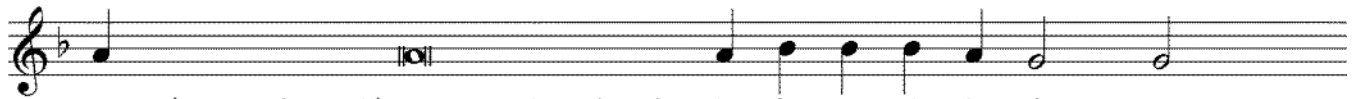
え、いのちをほどこすなんぢのせいなるきみ
 生 命 施 爾 聖 機 密



つをうくるをわれらにゆるせばなり。
 領 我 等 許



いのるわれらをいさぎよきにまもり、
 祈 我 等 潔 護



ひびになんぢのみちをならわしめたまえ、
 日 日 爾 道 習 給



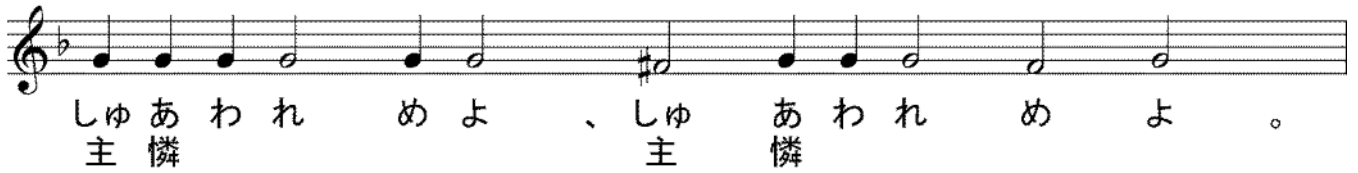
ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ



ヤ。

司祭) ^{つつし た しんせい しじょう ふし いのち ほどこ てんじょう おそ せい} 謹みて立て、神聖・至淨・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖

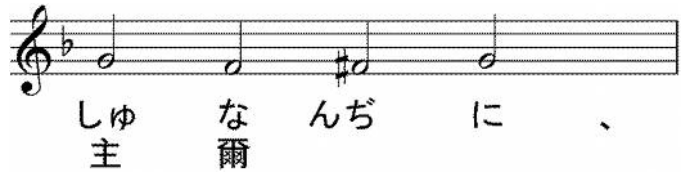
^{きみつ う よろ しゅ かんしゃ} 機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救い憐み護れよ、

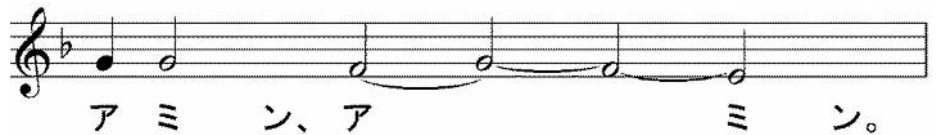
司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい もと われらおのれ みおよ たがい} 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に

^{おのおの み もつ ならび ことごと われら いのち もつ かみ いたく} 各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ^{けだしなんぢ われら せいせい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 蓋爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世

に、



司祭) ^{へいあん い} 平安にして出づべし、



司祭) ^{しゅ いの} 主に禱らん、



司祭) ^{なんぢ さんよう もの ふく くだ およ なんぢ たの もの せい しゅ なんぢ たみ すく} 爾を讚揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主よ、爾の民を救

^{およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい じゅうまん まも なんぢ どう び} い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充滿を守り、爾が堂の美なるを

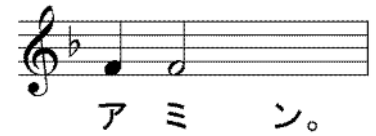
^{あい もの せい なんぢ しんせい ちから もつ かれら こうえい およ われらなんぢ たの} 愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む

^{もの のこ なか なんぢ せかい なんぢ しよきょうかい しよしさい わ くに てんのうおよ くに} 者を遣す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を

^{つかさど ものおよ なんぢ しゅうじん へいあん たま けだしおよそ ぜん ほどこし およそ ぜんび} 司る者及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる

たまもの うえ なんぢこうめい ちち くだ われらこうえい かんしゃ ふくはい なんぢちち
賜は、上より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拜を爾父と

こ せいしん けん いま いつ よよ
子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



ねがわくはしゅのなはあがめほめられていまよ
願 主 名 崇 讚 今

りよよにいたらん。ねがわくはしゅのなはあが
世 世 至 願 主 名 崇

めほめられていまよりよよにいたらん。ねが
讚 今 世 世 至 願

わくはしゅのなはあがめほめられていまよりよ
主 名 崇 讚 今 世

よにいたらん。
世 至

誦經) われいづ とき しゅ ほ あ かれ ほ つね わくち あ わ たましい しゅ
我何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が靈は主
もつ ほこ おんじゅう もの き たの われ とも しゅ とうと とも かれ な あが
を以て誇らん、溫柔なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を尊め、偕に彼の名を崇
ほ われかつ しゅ たづ かれ われ き い わ すべ あやう われ まぬか
め讃めん。我嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての危きより我を免
たま め あ かれ あお もの たら かれら おもて はぢ う こ
れしめ給えり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。此の
まづ ものよ しゅ き い これ そのことごと かんなん すく しゅ つかい しゅ
貧しき者呼びしに、主は聆き納れて、之を其悉くの艱難より救えり。主の使は主
おそ もの めぐ まも かれら たす あぢわ しゅ いか じんじ み かれ たの
を畏るる者を環り衛りて、彼等を援く。味えよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃
ひと さいわい およ しゅ せいじん しゅ おそ けだしかれ おそ もの とぼ
む人は福なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋彼を畏るる者は乏しきことな
し。少き獅子は乏しくして餓え、唯主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし。

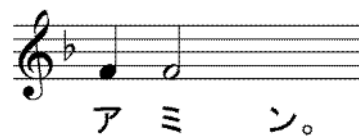
司祭) (黙誦： 親ら法律と諸預言者との成満にして、父の定制を悉く成満せ

わ かみ つね われら こころ よろこび たのしみ じょうまん たま
しハリストス我が神よ、常に我等の心を喜と樂とに成満せしめ給え、

いま いつ よよ
今も何時も世々に、)

司祭) ^{ねがわ}願 ^{しゅ}くは主の降 ^{こうふく}福は、其 ^{そのおんちよう}恩 ^{じんあい}寵と仁愛とに因りて常に爾等 ^よに在らん、今も何時も

^{よよ}世々に、



※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP33【 ^{リテイヤ}永眠者の爲の熱衷祈祷】に飛ぶ。

【 通常の終結 】

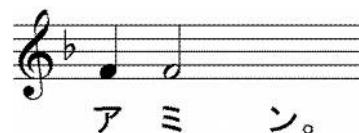
司祭) ^{かみわれら}ハリストス神我等の ^{たのみ}恃よ、^{こうえい}光榮は爾に歸す、^{なんぢ}光榮は爾に歸す、

司祭) ^し死より復 ^{ふくかつ}活せしハリストス我等の ^{われら}眞の神は、^{まこと}其至 ^{かみ}淨なる母、^{そのしじょう}光榮にして ^{はは}讚美 ^{こうえい}たる ^{さんび}

^{せいしと}聖使徒、我等の ^{われら}聖 ^{せいしんぶ}神父 ^{だいしゅきょうせいきんこう}コンスタンチノーポリスの大主教 ^{せい}聖金口 ^{きんこう}イオアン、

^{こくしょうほうしん}克肖 ^{わがしよしんぶ}捧神なる我諸 ^{およ}神父、^{しよせいじん}(某) ^{きとう}及び諸 ^{より}聖人の ^{われら}祈禱に ^{あわれ}因て我等を ^{たま}憐み給わん。

^{ぜん}善にして ^{ひと}人を ^{あい}愛する ^{しゅ}主なればなり、



【 萬壽詞 】



かみよ、わがくにのてんのおう、および
神我國天皇及
くにをつかさどるもの、われらのふしゅ
國司者我等府主
きょうセラフィム、およびことごとくのせいきょう
教及悉正教
のハリステイアニンら を、いくとせにもまもり
等幾歳も護り
たまえ。
給

(祈祷終了、十字架接吻)

【 永眠者の爲の^{リテイヤ}熱衷祈祷 】

ひとをあいするきゆうせ いしゅよ、しせしぎ
人 愛 救 世 主 死 義

じんのたましいとともに、なんぢがぼくひの
人 靈 借 爾 僕 婢

たましいをやすんぜしめて、かれらを
靈 安 彼 等

なんぢにあるふくらくのいのちに、まもり
爾 在 福 樂 生 命 護

たまえ。しゅよなんぢがしよせいじんのあん
給 主 爾 諸 聖 人 安

そくするところに、なんぢがぼくひのたま
息 處 爾 僕 婢 靈

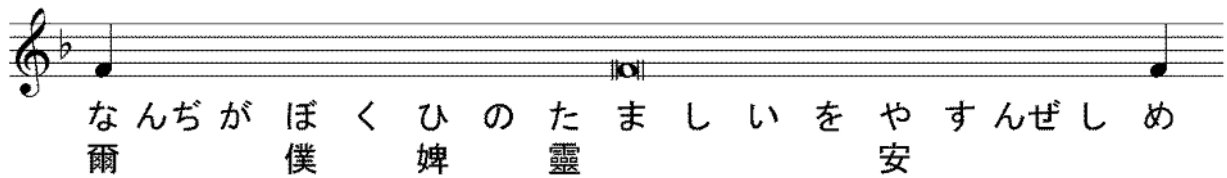
しいをやすんぜしめたたまえ。なんぢひとりひ
安 給 爾 獨 人

とをあいするしゅなればなり。

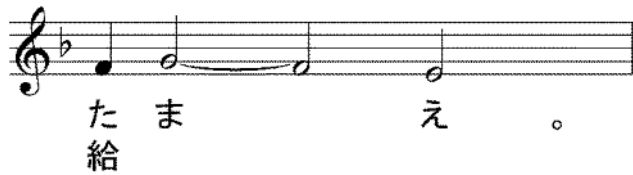
こうえいはちちとことせいしんにきす、
光 榮 父 子 聖 神 歸

なんぢはぢごくにくだりてつながれしものの
爾 地 獄 降 繋 者

くさりをときたるかみなり。みづから
鎖 釈 神 親



なんぢがぼくひのたましいをやすんぜしめ
爾 僕 婢 靈 安

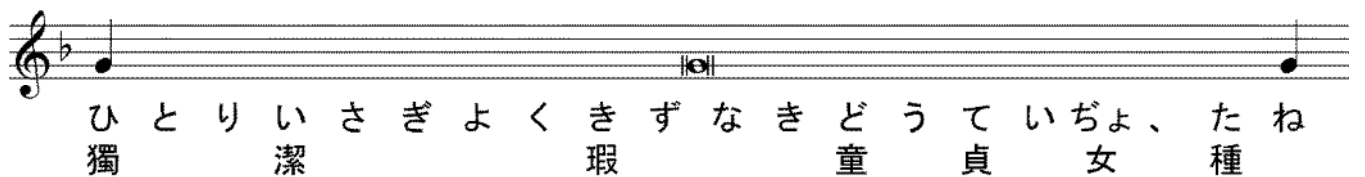


た ま え 。



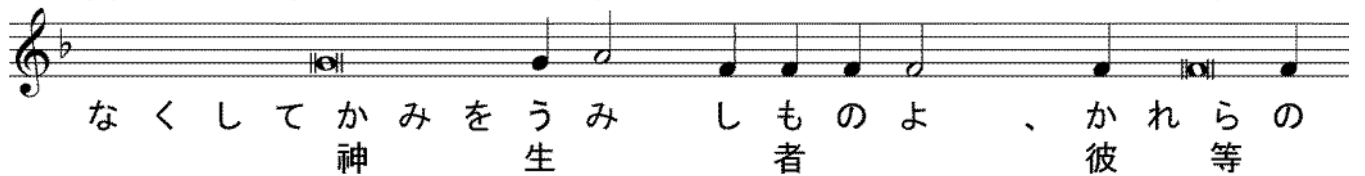
い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。

今 何 時 世 世



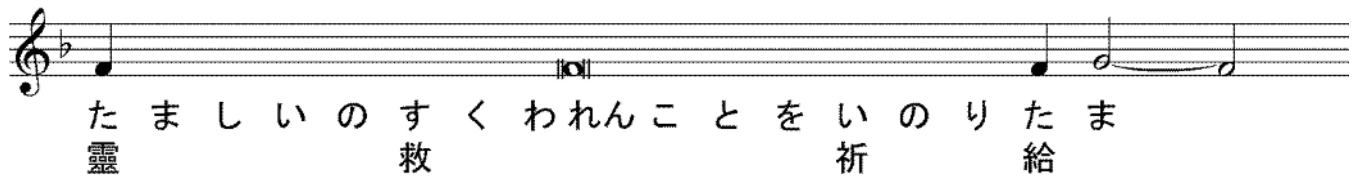
ひ と り い さ ぎ よ く き ず な き ど う て い ぢ よ 、 た ね

獨 潔 瑕 童 貞 女 種



な く し て か み を う み し も の よ 、 か れ ら の

神 生 者 彼 等



た ま し い の す く わ れ ん こ と を い の り た ま

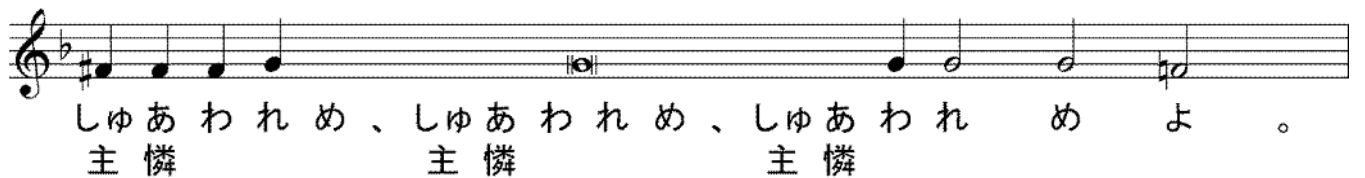
靈 救 を 祈 給



え 。

【 重聯禱 】

司祭) ^{かみ なんぢ おおい あわれみ より われら あわれ なんぢ いの き い あわれ} 神よ、爾の大なる憐に因て我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

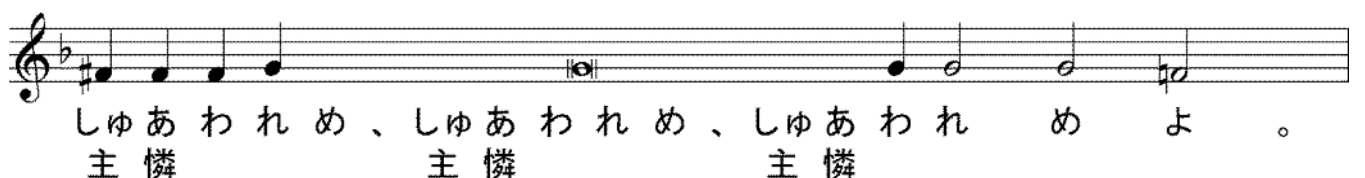


しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。

主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またねむ かみ ぼくひ たましい あんそく ため およ かれら およ じゆう じゆう つみ} 又寝りし神の奴婢(某)の靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と自由ならざる罪

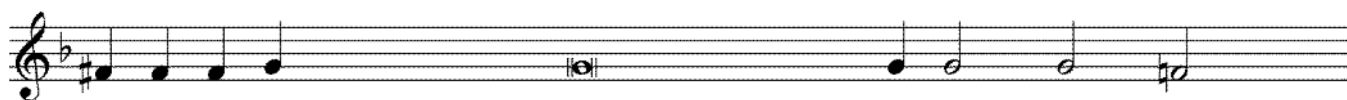
^{ゆる ため いの}の赦されんが爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。

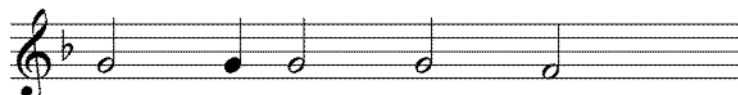
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{しゅかみ かれら たましい しよぎじん あんそく ところ い たま いの} 主神が彼等の靈を諸義人の安息する處に入れ給わんことを禱る、



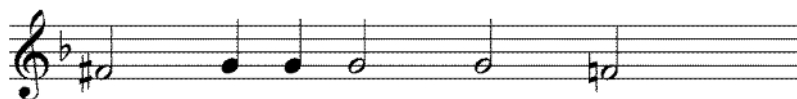
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{かれら} 彼等に神の ^{かみ} 憐 ^{あわれみ} と天國と諸罪の ^{てんごく} 赦 ^{しよざい} とを賜わんことを、^{ゆるし} ハリストス ^{たま} 我死せざる王 ^{わがし} 及 ^{おうおよ}
^{かみ} び神に願う、^{ねが}



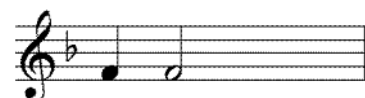
しゅ たま え よ。
 主 賜

司祭) ^{しゅ} 主に禱らん、^{いの}



しゅ あわれめよ。
 主 憐

司祭) ^{もろもろ} 諸の ^{れいしん} 靈神と ^{もろもろ} 諸の ^{にくたい} 肉體との ^{かみ} 神、^し 死を ^{ほろ} 亡ぼし ^{あくま} 惡魔を ^{むなし} 虚くし、^{なんぢ} 爾の ^{せかい} 世界に ^{いのち} 生命
^{たま} を賜いし ^{しゅ} 主よ、^{なんぢみづか} 爾 ^{ねむ} 親ら ^{なんぢ} 寢りし ^{ぼくひ} 爾の ^{たましい} 僕婢(某)の ^{ひか} 靈 ^{ところ} を ^{しげ} 光る ^{くさば} 處、^{へいあん} 茂き ^{ところ} 草場、^{やまい} 平安
^{かなしみ} の ^{なげき} 處、^と 病と ^お 悲と ^と 歎との ^{あんそく} 遠ざかる ^{ぜん} 處に ^{ひと} 安息せしめ、^{あい} 善にして ^{かみ} 人を ^{かみ} 愛する ^{かみ} 神な
^{より} るに ^{かれら} 因て ^{あるい} 彼等が ^{ことば} 或は ^{あるい} 言、^{おこない} 或は ^{あるい} 行、^{おもい} 或は ^{おか} 思にて ^{ことごと} 犯しし ^{つみ} 悉くの ^{ゆる} 罪を ^{たま} 赦し給
^{けだし} え。蓋 ^{ひと} 人 ^い 一 ^{つみ} も ^{おこな} 生きて ^{もの} 罪を ^{ただなんぢ} 行 ^{つみ} わざる ^{なんぢ} 者なし、^ぎ 唯 ^{えいえん} 爾 ^ぎ は ^ぎ 罪なし、^ぎ 爾 ^ぎ の ^ぎ 義は ^ぎ 永 ^ぎ 遠の ^ぎ 義、
^{なんぢ} 爾 ^{ことば} の ^{しんじつ} 言 ^{けだし} は ^{われら} 眞 ^{かみ} 實 ^{なんぢ} なり。蓋 ^{ねむ} ハ ^{なんぢ} リ ^{ぼくひ} ス ^{ぼくひ} ト ^{ぼくひ} ス ^{ぼくひ} 我等 ^{ぼくひ} の ^{ぼくひ} 神 ^{ぼくひ} よ、^{ぼくひ} 爾 ^{ぼくひ} は ^{ぼくひ} 寢 ^{ぼくひ} り ^{ぼくひ} し ^{ぼくひ} 爾 ^{ぼくひ} の ^{ぼくひ} 僕 ^{ぼくひ} 婢 ^{ぼくひ} (某) ^{ぼくひ} の
^{ふくかつ} 復 ^{いのち} 活 ^{あんそく} と ^{あんそく} 生命 ^{あんそく} と ^{あんそく} 安息 ^{あんそく} なり。我 ^{われら} 等 ^{われら} 光 ^{なんぢ} 榮 ^{なんぢ} を ^{なんぢ} 爾 ^{むげん} と ^{ちち} 爾 ^{しせいしぜん} の ^{いのち} 無 ^{いのち} 原 ^{いのち} の ^{いのち} 父 ^{いのち} と ^{いのち} 至 ^{いのち} 聖 ^{いのち} 至 ^{いのち} 善 ^{いのち} に ^{いのち} して ^{いのち} 生命 ^{いのち} を
^{ほどこ} 施 ^{なんぢ} す ^{しん} 爾 ^{けん} の ^{いま} 神 ^{いつ} と ^{よよ} に ^{よよ} 獻 ^{よよ} ず、^{よよ} 今 ^{よよ} も ^{よよ} 何 ^{よよ} 時 ^{よよ} も ^{よよ} 世 ^{よよ} 世 ^{よよ} に、

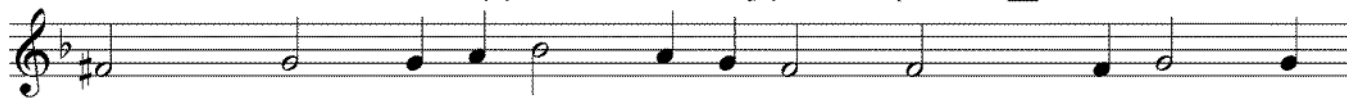


ア ミ ン。

【 永眠者の爲の小讃詞 】



ハリスト スよ、なんぢがぼくひのたましい
 爾 僕 婢 靈



を、しよ せいじんとともに、やまい
 諸 聖 人 偕 疾

も かな し み も な げ き も な く 、 お わ
悲 歎 終
り な き い の ち の あ る と こ ろ に や す ン ぜ
生 命 處 安
し め た ま え 。
給

【 終 結 】

司祭) ハリストス^{かみわれら たのみ}神我等の 侍^よ、光 榮^{こうえい なんぢ き}は 爾^きに 歸^{こうえい なんぢ き}す、光 榮^{こうえい なんぢ き}は 爾^きに 歸^{こうえい なんぢ き}す、

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今
い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。しゅ あ わ れ め 、 しゅ
何 時 世 世 主 憐 主
あ わ れ め 、 しゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ
憐 主 憐 福 降
せ 。

司祭) 死^しより 復 活^{ふくかつ}し、生^いける 者^{もの}と 死^しせし 者^{もの}を 其^{その} 全 能^{ぜんのう}の 手^てに 保^{たも}ち 給^{たま}う ハリス^{われら}トス 我^ま等^{こと}の 眞^{まこと}の

神^{かみ}は、其^{その} 至^{しじょう} 淨^{はは} なる 母^{こうえい}、光 榮^{さんび} に して 讚^{せいしと} 美^{こくしょう} たる 聖^{わがしよ} 使^{しんぶ} 徒^ぶ、克^く 肖^{せう} 捧^{ほう} 神^{しん} なる 我^{わが} 諸^{しよ} 神^{しん} 父^ぶ、

(某) 及^{およ} び 諸^{しよ} 聖^{せい} 人^{じん}の 祈^{きとう} 禱^{より} に 因^{ねむ} て、寝^{ぼく} り し 僕^ひ 婢^ひ (某) の 靈^{たましい} を 諸^{しよ} 義^ぎ 人^{じん}の 住^{すま} 所^い に 入^い れ、

アブラ^ふアム^との 懷^{やす} に 安^{しよ} ぜ し め、諸^{しよ} 義^ぎ 人^{じん}の 列^{れつ} に 加^{くわ} え、及^{およ} び 我^{われら} 等^{あわれ} を 憐^{たま} み 給^{ぜん} わ ん。善^{ぜん} に

し て 人^{ひと} を 愛^{あい} す る 主^{しゅ} な れ ば な り、

ア ミ ン。

司祭 ^{しゅ なんぢ ぼくひ} 主よ、爾の僕婢(某)の ^{さいわい} 福 ^{ねむり} なる寝 ^{えいえん} に永遠 ^{あんそく} の安息 ^{あた} を與え、^{かれら} 彼等に ^{えいえん} 永遠 ^{きおく} の記憶

^{な たま}
を爲し給え、

え い え んの き お憶
永 遠 記 憶
く 、 え い え んの き記
お憶 く 、 え い え遠
んの き記 お憶 く 。

【 萬壽詞 】

か みよ 、 わ が く に の てん の お う、 および
神 我 國 天 皇 及
く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ
國 司 者 我 等 府 主
きょうセラフィ ム、 および ことごとく の せい きょう
教 及 悉 正 教
のハリステイア ニンら 等 を 、 いくとせにもまもり
た ま え 。
給

(祈祷終了、十字架接吻)

りょうせいかんしゃしゅくぶん
【 領 聖 感 謝 祝 文 】

かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き
神や光 榮は 爾に歸す、神や光 榮は 爾に歸す、神や光 榮は 爾に歸す、

【 第一祝文 】 しゅわ かみ なんぢわれざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか もの
主我が神や、爾 我罪人を棄てずして、尚 爾の聖なる機密に 與る者
いた たま なんぢ かんしゃ われた もの なんぢ しじょう てん たまもの う
と致させ給うを 爾に感謝す、我堪えざる者に 爾が至 淨なる天の 賜を受くる
ゆる たま なんぢ かんしゃ しゅさい ひと あい しゅ われら ため し ふくかつ われ
を容し給うを 爾に感謝す、主 宰・人を愛する主、我等の爲に死して復 活し、我
たましい からだ おん あた これ せい ため われら こ おそ べ いのち
が 靈と 體とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を
ほどこ きみつ たま もの もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき
施す機密を賜いし者や、求む此の機密は、我にも 靈と 體とを癒し、凡の敵の
がい か われ こころ め あきら われ たましい ちから へいあん はぢ え しん
害を驅り、我が心の目を明かにし、我が 靈の力を平安にし、耻を得ざる信と
いつわり あい えいち み なんぢ いましめ まも なんぢ しんせい おんちよう
し、 偽なき愛とし、睿智を充たし、 爾の誠を守らしめ、 爾が神聖の恩 寵
ま なんぢ くに つ もの え たま われ か ごと こ きみつ
を益し、 爾の國を嗣がしむる者となるを得せしめ給え、我は此くの如く、是の機密に
なんぢ せいせい まも つね なんぢ おんちよう おも またおの ため せいかつ すなわち
て 爾の成聖に護られ、常に 爾の恩 寵を思い、復己が爲に生活せず、乃
なんぢわ しゅさいおよ おんしゅ ため せいかつ もつ えいせい のぞみ いだ こ よ はな
爾我が主 宰及び恩主の爲に生活し、以て永生の望を懐き、此の世を離れて、
えいえん いこい か しゅく もの た こえ およ なんじ かんばせ い つく びぜん み
永遠の息、彼の祝する者の絶えざる聲、及び 爾が 顔の言い盡されぬ美善を見
もの かぎ たのしみ ところ いた けだし わ かみ なんぢ なんぢ あい
る者の限りなき 樂の處に至らん、蓋ハリストス我が神や、 爾は 爾を愛する
もの まこと のぞみ い つく たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ うた
者の眞の望と言い盡されぬ 樂なり、凡そ造を受けし者は 爾を世世に讃め歌う、

「アミン」

【第二祝文 聖大ワシリイの原文】 しゅさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ
主 宰ハリストス神、萬世の王、萬物の造成者や、
およ われ たま ところ しょぜん かついのち ほどこ しじょう なんじ きみつ う たま
凡そ我に賜いし所の諸善、且生命を施す至 淨なる 爾の機密を領けさせ給いし
なんじ かんしゃ またなんじ いの ぜん ひと あい しゅ われ なんぢ おおい した
を 爾に感謝す、又 爾に祈る、善にして人を愛する主や、我を 爾が庇の下に、
なんぢ つばさ かげ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ
爾が翼の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、 潔き良心を以て、
どうぜん なんぢ せいたいせいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだし
當然に 爾の聖體聖血を領け、以て罪の赦と永生とを得るを致させ給え、蓋
なんぢ いのち かに せいせい いづみ しょぜん たま しゅ われらなんぢ ちち せいしん こうえい
爾は生命の糧、成聖の泉、諸善を賜う主なり、我等 爾と父と聖神とに光 榮
けん いま いつ よよ
を獻ず、今も何時も世世に、「アミン」

【 第三祝文 聖シメロン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゅ あまん おのれ み かに
我が造成主、甘じて己の身を糧と

われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしよせつ
して我に與え、火にして不當者を焚く者や、求む我を焚く母れ、乃吾が百體諸節
しんぶく い わ しょざい いばら や たましい きよ おもい せい すじ ほね かた ごかん
心腹に入り、吾が諸罪の棘を焚き、靈を淨め、思を聖にし、筋と骨とを固め、五官
あきら わ ぜんしん なんぢ おそ おそれ くぎ つね われ おお われ たも われ
を明かにし、吾が全身を、爾を畏るる畏に釘うち、常に我を庇い、我を保ち、我を
たましい がい もろもろ おこない ことば まも われ きよ われ あら われ かざ われ おさ
靈を害する諸の行と言とより護り、我を淨め、我を滌い、我を飾り、我を治
われ ひら われ てら わ またつみ すまい ひとりなんぢ せいしん すまい あらわ
め、我を啓き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神の住所たるを顯
およそ あくしゃおよそ よく われせいたい い よ なんぢ いえ もの に ひ
し、凡の悪者凡の慾は、我聖體の入るに依りて爾の家となりし者より逃ぐること、火
より逃ぐるが如くならしめ給え、我其轉達者として、諸の聖者、諸品の神使、爾の
ぜんく ちえ すと およ なんぢ むてんしじょう はは なんぢ すす じれん しゅわ
前驅、智慧なる使徒、及び爾が無玷至淨の母を爾に進む、慈憐の主我がハリストスや、
かれら きとう い なんぢ えきしゃ ひかり こ たま けだしひとりしぜん しゅ なんぢ われら
彼等の祈禱を容れて、爾の役者を光の子となし給え、蓋獨至善の主や、爾は我等
たましい せいせい こうみょう われらみなかみ しゅさい よろ ところ ごと ひび こうえい なんぢ
の靈の成聖と光明なり、我等皆神と主宰に宜しき所の如く、日に光榮を爾に
けん
獻ず、

【 第四祝文 】 しゅ われら かみ ねがは なんぢ せいたい わ ため
主イイスハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に

えいせい なんぢ そんけつ つみ ゆるし ねがわ こ かんしゃ まつり わ ため きえつ
永生となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くは此の感謝の祭は、我が爲に喜悦
そうけん あんらく またおそ べ なんぢ さいど こうりん とき われざいにん なんぢ こうえい
と壯健と安樂とならん、又畏る可き爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮の
みぎ た え たま なんぢ しじょう はは しょせいじん きとう よ
右に立つを得せしめ給え、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に依りてなり、

【 第五祝文 至聖生神女に捧ぐ 】 しせい ちょさい しょうしんぢょ わ くら たましい
至聖なる女宰・生神女、我が味みたる靈の

ひかり わ たのみ おおい かくれが なぐさめ よろこび なんぢ われた もの なんぢ こ しじょう
光、吾が憑恃と悵と避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪えざる者に、爾の子の至淨の
たいしそん ち う もの え たま なんぢ かんしゃ なおいの まこと ひかり う
體至尊の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾に感謝す、猶祈る、眞の光を生み
もの わ ころ れいもく あきらか ふし いづみ う もの われつみ ころ もの い
し者や、吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺されたる者を生
たま じれん かみ じあい はは われ あわれ わ ころ しょうかん ひつう わ おもい
かし給え、慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、吾が思に
けんそん わ とりこ いねん よびかへし たま われ いき た いた つみ え
謙遜、吾が虜となりし意念に呼還を賜い、我に呼吸の絶えんとするに至るまで、罪を獲
しじょう きみつ せいせい う たましい からだ いやし う いた ならび われ
ずして、至淨なる機密の成聖を受けて、靈と體との醫を得るを致し、並に我に
つうかい うけとめ なみだ あた しょうがいにんぢ かしょうさんえい たま けだしなんぢ よよ さん
痛悔と承認との涙を與えて、生涯爾を歌頌讚榮せしめ給え、蓋爾は世々に讚
び こうえい み こうむ
美と光榮とを満ち被る、「アミン」

2023年9月29日 改訂

